

# 近代文学の諸相

\* 吉田精一 著作集

# 近代文学の諸相

\* 吉田精一著作集

11

桜楓社

吉田精一著作集 第十一卷

近代文学の諸相

昭和五十六年五月十二日 第二刷発行

定価 二八〇〇円

著者 吉田 精一

発行者 及川 篤二

発行所 蜷 桜 楓 社

東京都千代田区猿樂町一―八―一三

電話東京 03 二九五―八七七一(代義)

振替東京六一八〇二〇郵便番号一〇一

© 吉田精一 一九八一年

Printed in Japan

意丁・乱丁本はお取り替へを致します。

吉田精一著作集 第十一卷 目次

# I 明治大正の文芸雑誌

|   |                      |     |
|---|----------------------|-----|
| 一 | しからみ草紙……………          | 7   |
| 二 | めさまし草・芸苑・芸文・万年艸…………… | 18  |
| 三 | 新著月刊……………            | 32  |
| 四 | 明星……………              | 38  |
| 五 | 馬酔木……………             | 51  |
| 六 | スバル……………             | 75  |
| 七 | 三田文学……………            | 104 |
| 八 | 白樺……………              | 126 |
|   | 大正時代と白樺派の位相……………     | 147 |
| 九 | 新思潮……………             | 157 |
| 十 | 朝日文芸欄……………           | 178 |

# II 文学評論の系譜

|   |                |     |
|---|----------------|-----|
| 一 | 明治大正の文芸評論…………… | 189 |
| 二 | 作家作品論の系譜……………  | 225 |

### Ⅲ 近代の作家と作品

|   |                 |     |
|---|-----------------|-----|
| 一 | 翻案時代の紅葉……………    | 239 |
| 二 | 樋口一葉……………       | 245 |
| 1 | 樋口一葉……………       | 245 |
| 2 | 一葉の危機……………      | 251 |
| 3 | 樋口一葉の一資料……………   | 256 |
| 4 | 露伴と一葉……………      | 260 |
| 三 | 近松秋江……………       | 263 |
| 四 | 白樺における志賀直哉…………… | 279 |
| 五 | 大正の作家……………      | 304 |
| 1 | 小泉八雲……………       | 306 |
| 2 | 高浜虚子……………       | 308 |
| 3 | 伊藤左千夫……………      | 311 |
|   | 左千夫の小説……………     | 313 |
| 4 | 長塚節……………        | 316 |
| 5 | 田村俊子……………       | 318 |

第十一卷 近代文学の諸相  
 解説 浅井 清  
 359  
 あとがき  
 355

|       |       |     |       |     |      |       |      |      |
|-------|-------|-----|-------|-----|------|-------|------|------|
| 14    | 13    | 12  | 11    | 10  | 9    | 8     | 7    | 6    |
| 白鳥の戯曲 | 吉田絃二郎 | 菊池寛 | 豊島与志雄 | 中勘助 | 長与善郎 | 野上弥生子 | 小川未明 | 素木しづ |
| 352   | 349   | 345 | 340   | 339 | 336  | 332   | 327  | 324  |

\*

# I

## 明治大正の文芸雑誌



## 一 しからみ草紙

「しからみ草紙」は明治二十二年十月二十五日創刊号を出した。表紙に文学評論と角書し、本文第一頁の右端には文学評論と傍書する。即ち正しくいえば「文学評論 しからみ草紙」である。発行所は下谷区上野花園町十一新声社で、森鷗外の居宅である。十三号（明三・一〇）からは鷗外の転宅にともなうて、新声社が本郷区駒込千駄木町五七番地に移った。

体裁は菊判相当の大きさで、初号は本文四十四頁、ほかに附録に「古典遺響」として「紀行袖くらべ」「好色二代男」「五大力恋緘」の復刻が小部分ずつのっている。この附録はのることもあらぬこともあるが、本文は少ない時は四十二、三頁、多い時は五十八頁に達した。定価は一冊七錢である。

なお四十四号から寺山星川の編集した「城南評論」という雑誌を合併した為に、発行所を柵社と改め、表紙の体裁もすこしかわっている。そうして本文も「しからみ草紙」と「城南評論」との二部にわかつている。終刊は五十九号（明二七・八）である。日清の戦役がおこり、鷗外も軍医部長として出征する為に廃刊したのである。

何故このような雑誌をおこしたかについては、森鷗外の「故落合直文君に就て」を見るとわかる。これよりさき、落合直文、市村瓚次郎、井上通泰、及び妹の小金井きみ子等と共に詩の翻訳を中心とした「於母影」というものを『国民之友』明治二十二年の夏季附録にかかげた。その稿料がもとなったという。鷗外文に

よると、

「於母影」を「国民之友」に載せられてから、民友社が報酬として、多分五十円だと思ひますが、金を私の所へ贈つたのであります。それで私が、この金をどう処分したら好からうと云ふ事を諸君に相談しましたが、別に名案も無い。それより前から、例の無謀な連中でありますから、何か世間へ向つて仕事を為て見たい。と云ふ事を皆思つて居たものでありますから、丁度よいから、この五十円で雑誌を発行しようでは無いかといふ事を、私が發議したのであります。それから私の弟に篤次郎と云ふ者があります。それに色色聞合はさせて、雑誌と云ふものは一冊どの位で出来るだらうかと云ふ事を證議した所が、五十円有つたら、どうにか間に合ふだらうと云ふ事でありました。それで別段諸君に御不同意も無かつたものでありますから、遂に「しからみ草紙」と云ふものが出来ました。

その時、文学雑誌と云ふ以上は、多少美術的に出来なければ成るまい。それには紙も一層良いのがよからう。体裁も余りに野鄙だと云ふやうな説もありましたが、例の五十円に制せられて居つたものでありますから、あれ以上はむづかしかつたのであります。

とある。創刊の経緯、それが鷗外の發議によつて出来たことはこれで明らかである。編集経営その他が鷗外及び弟と二人の手になつたこと、及び「しからみ草紙」の題名の意味、發行部数などについては、「柵草子のころ」(大三・四)という読売新聞に出た談話筆記に出ている。それを次に引用する。

柵草紙といふ名はつまり滔々たる文壇の流に柵をかけると云ふ意味からであつた。経営は中々うまく行かなかつた。……十円二十円の損はよくあつた。弟と二人で一切やつた。一番よく出た時は二千部位であつた。たまに売れさうだから再版したりなどして千部も残本を脊負込んで夜店によく出したものだ。(略)

ところで「しからみ草紙」は元來は「文学評論」という名前を予定していたらしい。それは鷗外の市村瓊次郎あての書簡(明二・一〇・八)によつて推測される。

(略)初ノ題号ヲ用キ難キ所以ハ種ガ種ニテ論文トテハ小生ガ無雜作至極ナル演劇論ノミコレニテ大書シテ文学評論ト申サンモ裏恥カシキコトト存候而已依テ落合君ノ意見ノミニテ何トカ果決可仕見込ニ御座候、  
(傍点筆者)

「文学評論」をかくて「しからみ草紙」の頭に割注して角書よりの形をとることになつたのである。  
「しからみ草紙」の内容が文学評論にあること、以上で了解されるが、今その発行趣旨を説いた創刊号巻頭の「しからみ草紙の本領を論ず」(S・S・S)を見ると、

西学の東漸するや初めその物を伝へてその心を伝へず学は則ち格物窮理、術は即ち方技兵法、世を挙げて西人の機智の民たるを知て、その徳義の民たるを知らず況んやその風雅の民たるをや(略)

今や此方嚮は一転して西方優美の文学は、その深邃の哲理と共に我疆に入り来れり而してその文学の種

属を問へば叙情詩あり叙事詩あり又た戯曲あり固より一体に局せずと雖も叙事詩中の一体にして、輒今、西欧諸洲に盛行する小説を以てこれが主とす嗚呼、明治の天地は小説の天地となり「小説熱」の語は近代西人の所謂「作詩炎」<sup>デビトリヤス</sup>に好対を与へたり

然るに我邦の文学界には外より来れる分子既に甚だ多し（略）本国、支那、西欧の種々の審美学的分子は此間に飛散せり此混沌の状は決して久きに堪ふべきものにあらず余等はその澄清の期の近きにあるを知る而してそのこれを致すものは批評の一道あるのみ（略）

余等が、「しからみ草紙」の発行を企てしも亦た聊か審美的の眼を以て天下の文章を評論しその眞實を較明し、工廠を披剝して以て自然の力を助け蕩清の功を速にせんと欲するなり

とその目的本領を説いている。更にここには紙数を考えて引かなかつたが、批評の基準としては、「西欧文学者が審美学の基址<sup>キシ</sup>の上に築き起したる詩学<sup>ポエチック</sup>（余等は故らに「レトリック」の語を避けたり）を以て準繩となすことの止むべからざるを知ればなり」と云つて、批評を美学乃至文芸学に立脚させようとしているのである。

「しからみ草紙」が文学評論を立て前にした雑誌であることは疑いないが、しかしそれだけで全紙面をうずめたわけでは勿論ない。成立のそもそものが井上、落合、市村、小金井等との共同の仕事であるから、井上その他の歌及び歌話、落合の美文小説、市村その他の漢詩文、及び三木竹二（森篤次郎）の俳優及び歌舞伎作者の伝記研究などをものせている。十三号の裏に一一十二号に至る執筆者名がのっているが、総計七十七名を数える。ことに竹二の好みでか、江戸演劇関係のものは、この種の雑誌としては不似合なくらいに多い。

このほか鷗外の「うたかたの記」、露伴の「艶魔伝」の二創作がここに出たのが注目される。

これについては鷗外が「無名氏に答ふる書」(四四号)に、それまでの柵草紙の事業を概説しているので、便宜上それによると、彼は先ず評論、西洋小説、戯曲の翻訳、及び美学の紹介等のことをいったあとで、「文学史に関する材料の蒐集(井上通泰の桂园派諸家の伝、宮本潮来のフランス詩人の伝、鷗外のドイツ詩人の伝等)、(今製作の詩文露伴、直文、器堂、鷗外等の諸作、落合東廓の漢詩、松波遊山選の和歌、及び諸家の随筆)等をあげ、彙報・雑報の類を一切のせないことを看板にしている。そうではあるが、何といっても「しからみ草紙」の本領は、第一に評論、第二に「模範となるべき欧州美文の翻訳をば絶えず」(「無名氏に答ふる書」)のせたことにあった。

翻訳については、鷗外は英文学の紹介者は他にもあるから、もっぱらドイツ、フランス、ロシアの文学の紹介者たろうとした、という。その名目は劇ではレッシングの「折薔薇」、「俘とりこ」、小説ではドオデエ(仏)の諸作、オシップ・シュビン(独)の新篇「埋れ木」、アンデルセン(デンマーク)の即興詩人、レルモンツフ(ロシア)の「浴泉記」等で、あとの二つは終刊の際なお未完であった。この二つと「埋れ木」とが、とくに読者に多くの反響をあたえたのである。

さて評論についていえば、これは殆んど鷗外のひとり舞台であったといつてよい。ここにのせた鷗外の評論の種類は、演劇論、絵画論、及び文学評論であつて、文学論の中には、もっとも龐大な坪内逍遙との間にかわされた「没理想」論争、石橋忍月との間にかわされた「読罪過論」争、その他をふくんでいる。鷗外以外には北邨散士(矢崎嵯峨の舎)の「小説家の責任論」が目につく。鷗外は又ハルトマンの「審美論」を紹介している。

いまその内容について細かく紹介する余裕はないので、——それは殆んど評論家鷗外の主要な活動の半ば以上を論ずることになる——大体をつかんで、主として鷗外の立場を解説して置こう。

今更云わでものことだが、鷗外の立脚地はそれまでヨーロッパ文学の中心的な地位を占めていたゾラ等の自然主義に反対の態度を表明するものであった。これは必ずしもレアリスムを否定するという意味ではなく、自然主義の一派に数えられるドオデエに対しては、深い愛着を示している。そうかといって、彼の態度は一概に理想主義を是としたものではないが、多少ともその方向に傾いていたことは否定することができない。今「現代諸家の小説論を読む」(二号)を見ると、

(略) 心理的観察は固より小説を作るべき方便にして小説の目的にあらず、これをして美術の境を守らしめんとするには勢、「想」に依てこれを融化せざるべからず其汗垢を淨めざるべからず請ふ仏国近代の大家エミル・ゾラの自然派を見よ渠は心理学的分析に依て一成績を得ることに別に美の標準に依てこれを付度することを須たずしてこれを呼で「エトユード」と倣せり其弊やこれを学ぶものをして水と云へば必ず濁流を写し情と云へば必ず淫慾と殘忍の心とを写すに至らしむ亦た甚しからずや仏国にては他の美術区域——絵画にも「アンプレシヨニスト」(感銘派)といふ写生派あり自然に向て觀察を試み其得たる所をば一毫の私心、空想を加へずしてこれを絹素に委んとす(略)是れ豈、悉く方便に依て目的を忘れたるものにあらざやドーデーの如きは則ち然らず其自然を驅使するや塵埃は自ら脱落して美相、顯る縦令、渠をして極端自然主義を奉ぜしむるも其天性の美想はこれを冥々の裡に誘導すとも謂ふべき歟余等は嘗て読売新聞(九)に於て此弊を論じて云く「夫れ分析と解剖とは之を小説の結構に用ふること固より不可なるこ

となし、然れどもゾラーの直ちに分析、解析の成績（所謂エチュード）を以て小説となすは諸家の妥当ならずとする所なり蓋し実験の成績は事実なり……小説家は果して此の如き事実の範垣内を彷徨して満足すべきや……分析、解剖の成績は作家の良材なり之を運転使用する活法は独り覚悟に依て得べきのみと乃ちドーデー、ビーコンスフィールドを挙げて事実を活用して猶ほ美の約束に適へる例となしゾラーを挙げ或はこの約束を失ひしものならんかと云へり今ゾラーを除て此限界線を踰えたらんかとの疑あるものを算ふれば西欧の大家中に猶ほスカンデナヴィアのエンリック・イブセン、又た——或る著作例令ば「暗の威」と題したる伝奇に限りて——魯国のトルストイなどあるべし渠等の事実を役するや空想の融化を経ること充分ならずして自然を模倣したるかと思はるる処甚だ衆し余等は故に以為へらく實際小説流の極端は其弊、遂に自然を模倣するに至る是れ所謂、自然詩派の短処なりと。

この自然主義解釈にせよ、アンプレッシヨニスムに対する解釈にせよ、必ずしも正しいということとはできない。それは別としても、明らかにゾラ以下の作家と見られるドオデエやビーコンスフィールドをあげて、ゾラをおさえていることは、今日から見ると苦笑ものである。当時の鵑外はフランス語を解せず、そのフランス文学に対する知識は恐らくドイツ訳の作品及びドイツの評論家の批評から承けたものであらう。ことに彼の信奉したエドワルト・ホン・ハルトマンの美学が、いわゆる現実主義や實際派の文学を貶していたことも、彼の意見に大きな影響をあたえていたにちがいない。同時にイデアリスムス系統の哲学及び美学に関する彼の素養が真善美の三範疇をはっきりと区別し、美をあくまで純美の域にとどめようとしたことにも、多少とも唯美主義的リゴリズムに彼の態度を傾かせていたであらう。彼は嘗て女学雑誌記者（巖本善治）が「極

美の美術なるものは決して不徳に伴ふことを得べからず」といったのに反し、「極美の美術は時として不徳に伴ふことを得べし」（國民之友 明二・五、「しからみ草紙」二八号再掲）と云っているのである。

彼の「反實際派」的傾向は更に、「無名氏に答ふる書」に明らかである。

「即興詩人」は、やゝ「ロマンチック」派の嫌なきにあらずと雖も、所謂實際派の筆次第に卑褻に流れ、苛刻に奔る時、試にこれを取りて一誦するときは、大都製造場の塵中より出でて、山水明媚なる別天地に入りたる如き想あらむと存ぜられ候。そもそも實際派とは何ぞ。心理上の研究を旨とし、或は残忍、或は淫猥なる刺激の手段を用ゐることを、實際と申さば申されむ。されどこれが為に美を失はば芸術として何の価か候はむ。小説に心理上の真相あるべきことは論なけれど、この真相の理想にして真相にあらざることは、この頃片端を出したるハルトマン派の審美論によりて知るに足るべく候。（略）美は棄てずとも、世の真相は小説の中に現るべきを、とおもふ余に、わざと即興詩人のやうなるものを訳し申候。

果して「即興詩人」に「世の真相」があらわれているかどうか。彼の排斥したイブセン、トルストイにこの作をくらべるときに、再び苦笑せざるを得ないのは、私のみではあるまい。しかし「即興詩人」や「埋れ木」が多大の反響をもたらしたことを思う時に、当時の日本文学が、鷗外をもふくめて、まだ真の「實際派」を享受するほどの成熟に達していなかったことを考えねばならない。鷗外の趣味に多少偏向があつても、その偏向程度が、この時代を嚮導するにふさわしくなかったとはいひ切れないのである。

さて鷗外の傾向もしくは趣味はさることとして、次に「厳に審美の区域を守」った「しからみ草紙」は、